

## 陶淵明居宅考

中尾 健一郎

陶淵明は尋陽柴桑の人である。その代表作の一つである「飲酒」其の五に、「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」と詠われるように、その住まいは廬山を眺めやることのできる土地にあったとされている。筆者は、長らく陶淵明の住まいがどのような場所であったかについて思索していた。何故なら周知のように陶淵明の住居（以下、「陶宅」と略記）が何処にあったかということについては諸説があり、しかも幾度か転居しているため、陶詩に詠われる田園の風景が固定されたものなのか、それとも尋陽のあちこちで随意に詠われたものなのかさえ不明だからである。極端に言うなら、陶淵明が「悠然と南山を見」たのは、かりそめに住んだ土地における出来事だった可能性もあるのだ。言うまでもなく陶淵明は唐宋の文人に大きな影響を与えた詩人であるから、陶詩が作られた主要な場所について考えることは意義の無いことではないだろう。

ところで近年、上田武氏の『陶淵明像の生成 どのように伝記は作られたか』<sup>(年)</sup>が上梓され、同氏によって先行する諸説が丁寧に整理

されたことにより、陶宅の所在は廬山北麓の旧尋陽柴桑県城（江西省九江市の賽城湖）付近であったとの共通理解が得られたように思う。ただいづれにせよ、陶淵明が彼の地にどれほどの期間住んでいたのか。またそこは陶淵明の主要な居住地であったのかという疑問は残る。そこで尋陽の柴桑県城付近を陶宅の主要な所在と見なし、陶淵明の作品から窺い知ることのできる陶宅の移転とその事情及び陶宅周辺の環境について考察する次第である。なお、陶淵明の詩文は、南宋・李公煥『箋注陶淵明集』（四部叢刊初編所収）を底本に用い、清・陶澍注、戚煥埴校『靖節先生集』（中華書局香港分局、一九七三年）等の諸本を参照した。また陶淵明の事跡については、特に断らない限り、逯欽立校注『陶淵明集』（中華書局、一九七九年）附録「陶淵明事迹詩文繫年」（以下、「詩文繫年」と略記）に拠る。

一 陶宅における「東園」

陶淵明の住まいは「帰園田居」其の一に「方宅十余畝、草屋八九間」とあることから、邸宅の敷地は方形であり、広さは五千平方メートル（約七十メートル四方）、家屋は九室を備えていたと見られる。また陶詩の内容より、庭園には種々の植物が植えられていたことが分かる。<sup>(注)</sup>さらに陶宅の庭園に植えられた松と菊の位置については、ある程度特定できる。

乃ち衡宇を瞻て、<sup>すなは</sup>載ち欣び載ち奔る、僮僕は歛び迎へ、稚子は門に候つ。三径は荒に就き、松菊は猶ほ存す。幼を携へて室に入れば、酒の罇に盈つる有り。壺觴を引きて以て自ら酌み、庭柯を眇て以て顔を怡す。南窓に倚りて以て傲を寄せ、膝を容るの安んじ易きを<sup>つまひら</sup>審にす。(中略)雲は心無くして以て岫を出で、鳥は飛ぶことに倦みて還るを知る。景は翳翳として以て將に入らんとし、孤松を撫でて盤桓す。<sup>(注)</sup>

〔歸去來兮辭〕

「歸去來兮辭」は、義熙二年（四〇六）陶淵明が彭澤県令を辞めた翌年、尋陽の柴桑にて作られたものである。引用したのは、陶淵明が彭澤より帰宅する場面の描写である。「三径」は隱者の通る道、「松菊」は「飲酒」其の八に「青松 東園に在り、(中略) 独樹 衆乃ち奇とす」と詠われる松、及び「飲酒」其の五に「菊を採る東籬の下」と詠われる菊であろう。ことに「孤松を撫でて盤桓す」とい

う句から、陶淵明の愛でた松は「東園」のそれであることが窺われる。ここで登場する陶宅の「東」側の風景は、単に方位だけを詠うものではない。石川忠久氏は、「飲酒」其の五と其の七を始めとする「東」の語には「俗世を離れて静かに寛ぐ場」の意が含まれると指摘するが、<sup>(注)</sup>現実に自宅とその周辺を詠った陶淵明の作品のうち、「東」の用例は九例見られ、左記のように他の方位に比べるとその用例は甚だ多い。

〔東〕…九例

静寄東軒 (「停雲」)

閒飲東窓 (「停雲」)

東園之樹 (「停雲」)

薄言東郊 (「時運」)

戮力東林隈 (「丙辰歲八月中、於下潁田金穫」)

採菊東籬下 (「飲酒」其五)

嘯傲東軒下 (「飲酒」其七)

青松在東園 (「飲酒」其八)

登東臯以舒嘯 (「歸去來兮辭」)

〔南〕…六例

開荒南野際 (「歸園田居」其一)

嘉稔養南疇 (「酬劉柴桑」)

在昔聞南畝 (「癸卯歲始春、懷古田舍」)

南圃無遺秀 (「詠貧士」其二)

歩容与於南林（閑情賦）

倚南窓以寄傲（歸去來兮辭）

〔北〕：四例

新葵鬱北牖（酬劉柴桑）

北林采且豐（五月旦作、和戴主簿）

北窓下臥（与子儼等疏）

枯条盈北園（詠貧士）其二

〔西〕：四例

挈杖還西廬（和劉柴桑）

流目視西園（和胡西曹、示顧賊曹）

景落西軒（閑情賦）

將有事於西疇（歸去來兮辭）

右に挙げた東にまつわる詩句は、「詩文繫年」に拠れば、「和劉柴桑」「酬劉柴桑」「丙辰歲八月中於下溪田舎穫」を除き、すべて陶淵明の三十九歳から四十二歳までの時期（元興二年～義熙二年）、陶宅が柴桑にあった頃の作である。

こうして見ると、陶淵明は陶宅とその周辺では、確かに東の方位を好んで詩に詠んだことがわかる。案ずるに、陶淵明が「東」を好むのは、自邸に設けられた「東園」こそが彼のこよなく愛した「依依（したわしい）たる場所」だったからではないか。

栖栖失群鳥 栖栖たり 群れを失へる鳥

日暮猶独飛 日暮れて猶ほ独り飛ぶ

徘徊無定止 徘徊 定止無く

夜夜声転悲 夜夜 声 転た悲し

厲響思清遠 厲響 清遠を思ひ

去来何依依 去来 何ぞ依依たる

自植孤生松 自ら孤生の松に植ひ

斂翮遥来帰 翮を斂めて遙かに来たり帰る

勁風無榮木 勁風に榮木無く

此蔭独不衰 此の蔭 独り衰へず

託身已得所 身を託するに已に所を得たり

千載不相違 千載 相ひ違らず（「飲酒」其四）

清の丘嘉穗はこの詩について、「群を失へる鳥」は彭沢県令を辞任した陶淵明の喩えであり、またこの鳥が「孤生の松」に留まるのは、陶淵明が隠遁して田園を守ることの喩えであると述べる。つまり、官界に馴染めない陶淵明が、郷里に落ち着いたことの喩えであるとす。陶宅における「孤生の松」の所在は「東園」である。そこは俗世を離れた陶宅の中でも、殊に脱俗性を象徴する場所であったと考えられ、それゆえに陶淵明は此の場所を愛したと見える。この詩に続く「飲酒」其の五も、その舞台は「東園」である。

## 二 陶宅が柴桑にあった時期

「飲酒」二十首が作られた当時、陶淵明の住まいが尋陽柴桑東城

のどの辺りであったかについては、鈴木虎雄氏が次の詩の解説において、陶宅は柴桑県城の南端附近であると推測している。<sup>(注6)</sup>

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧 而して車馬の喧しき無し

問君何能爾 君に問ふ 何ぞ能く爾と

心遠地自偏 心遠ければ 地自ら偏なり

採菊東籬下 菊を採る 東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

山氣日夕佳 山氣 日夕に佳く

飛鳥相与還 飛鳥 相ひ与に還る

此中有真意 此の中に真意有り

欲弁已忘言 弁せんと欲して 已に言を忘る

〔飲酒〕其の五

有名な詩であるため、特に解説の必要はないと思うが、第五句・第六句については、若干ふれておかなければならないであろう。陶宅の位置を廬山の北麓に求める説の外に、これを廬山の南麓（正確には西南麓の楚城と栗里）に求める説もあるが、かりに廬山の南麓に陶宅があったとするならば、「東籬」の東に「南山」（廬山）があったことになる。方角に関わりなく廬山を「南山」と呼んだとすれば、矛盾は無いが、「悠然として南山を見る」の解釈に矛盾が生じる。何故なら、この句は通常、「意図せずして廬山の山容が目に入った」と解釈されるからである。<sup>(注7)</sup> 垣根を挟んで自宅の真向かいに

廬山があったのであれば、意識せずとも廬山が見えることは自明のことであろう。それでは、陶宅の位置を廬山北麓に求めたならばどうであろうか。小論の冒頭に紹介したように、陶宅が現在の賽上湖附近にあったとすれば、廬山の方角は彼の地の東南方向にあたる。その場合、陶淵明は「東籬」を挟んで真東を見たのではなく、斜め向こうの東南方向に廬山を見たことになる。陶淵明が東の垣根越しに東南の方向を見やると、そこにたまたま廬山が見えた。このように解釈したならば、陶宅の位置としては、廬山北麓の方が廬山南麓よりもよりふさわしいであろう。

それでは、陶淵明が柴桑県城に廬を結び、隠遁生活を過ごした時期は何時頃であろうか。陶淵明の故里が複数唱えられるのも、「移居」に見られるように、彼が複数の土地に居住したことによる。したがって、陶宅の有り様を考える上では、陶詩に詠われる住まいの情景が、いずれの土地のものであるかをある程度特定する必要があるだろう。そこで明らかにすべきことは、陶淵明が柴桑県城に住まなかった時期が、一体何時であったかということである。まず陶淵明の出仕の時期を提示すると、次のようになる。

- 太元十八年（三九三） 二十九歳 江州祭酒
- 隆安三年（三九九） 三十五歳 桓玄の幕僚
- 元興三年（四〇四） 四十歳 劉裕幕下 鎮軍參軍
- 義熙元年（四〇五） 四十一歳 劉敬宣幕下 建威參軍
- 同年 同 右 彭沢県令

陶淵明は、桓玄の幕下に仕えた三年間を除けば、すべて短期間で辞職しており、十二年の間に出仕と引退を繰り返している。この期間に、特に移居をほめかす作品は見られないため、この時期、陶宅は柴桑県城にあったと見てよい。

次に柴桑県城以外に住まいを構えた時期について考えよう。「詩文繫年」に拠ると、陶淵明が柴桑県城南郊の南村に移った時期は義熙七年（四一一）、南村より旧居に戻った時期は義熙十年（四一四）である。

明言こそないものの、「詩文繫年」を見る限り逯欽立氏は、「還旧居」の第二句「六載 去りて還た帰る」の起点を義熙四年（四〇八）に求めているようである。つまり、義熙四年から六年を数えれば、義熙十年となる。筆者はこの六年間が、陶淵明が柴桑県城の外に移り住んだ時期であると考ええる。

転居のきっかけとなった事件は、陶宅の失火である。義熙四年に作られた「戊申歲六月中、遇火」には、柴桑県城の陶宅が火事に遭ったために、陶淵明は自宅の門前にある舟中に寝泊まりを余儀なくされたことが詠われている。陶淵明は火事で焼け出された義熙四年に旧宅を離れ、別の土地つまり義熙五年に作られた「和劉柴桑」に見える「西廬」に移ったと見られる。実際に「和劉柴桑」には、「茅茨 已に治に就く」と、茅と茨で屋根を葺いたとの記述が見え、また義熙二年（四〇六）の作である「婦去来兮辞」には「農人 余に告ぐるに春に及べるを以てし、將に西疇に事有らんとす」と、

「西の耕地」（西疇）の存在が述べられていることから、陶宅の西方に耕地があったことが分かる。つまり、陶淵明は義熙四年の失火以後、義熙七年に南村に移居するまでの間、柴桑県城の陶宅の西方の耕地にあった「西廬」に居住していたと見られるのである。

ところで、そうであったならば、新たな疑問が起こる。それは、陶淵明は何の為に三年あまりを西廬で過ごさねばならなかったかということである。このことについては自宅の全焼という事件の外に、尋陽を取り巻く政治情勢の変化が考えられる。

『資治通鑑』を繙くと、義熙六年に広州刺史盧循が反乱を起し、一年もの間、尋陽が戦乱の巷となったことが分かる。つまり陶淵明が義熙四年の出火後、旧居に戻らなかったのは、盧循の乱を避けてのことであった可能性が高い。また、義熙七年に移居したのは、従来言われているように、尋陽の南郊に住む官僚達と交流を持つことの外に、乱後の混乱を避けるためではなかっただろうか。

この当時、反乱軍に席卷された尋陽が如何なる土地として認識されていたかは、この地を攻略した盧循の言葉より窺われる。

盧循、寇して諸県を掠め得る所無し。徐道覆に謂ひて曰く、師老いたり。尋陽に還り、併せて荊州を力取し、天下の三分の二を抛し、徐に更に健康と衡を争ふに如かざるのみ、と。

（『資治通鑑』卷一百十五）

盧循は盟友である徐道覆に対して、既に領有している尋陽に加え、荊州（江陵）を攻め取れば、天下の三分の二を占拠したことにな

るので、この両地を固めてから、首都建康の東晋政権と対峙しよう、と述べている。この語により、陶淵明の住む尋陽は単なる地方都市ではなく、当時の二大都市である東の建康、西の江陵と並ぶ、天下の要衝であったことがわかる。陶淵明が住んだのは、町はずれではあったものの、柴桑県城そのものは、繁華な都会だったのである<sup>(註5)</sup>。六年もの間、旧居から離れた陶淵明は、おそらく反乱軍が鎮圧され、都市としての秩序が回復されつつあることを鑑みて、再び柴桑県城に戻る気になったのであろう。

### 三 旧宅への帰還

次の詩は、義熙十年(四一四)旧居に戻った陶淵明の感慨が詠まれたものである。

疇昔家上京	疇昔	上京に家し
六載去還帰	六載	去りて還た帰る
今日始復来	今日	始めて復た来たり
惻愴多所悲	惻愴	悲しむ所多し
阡陌不移旧	阡陌	旧を移さざるも
邑屋或時非	邑屋	或ひは時に非なり
履歴周故居	履歴	故居を周り
隣老罕復遺	隣老	罕に復た遺る
歩歩尋往迹	歩歩	往迹を尋ね

有処特依依	処に特だ依依たる有り
流幻百年中	流幻 百年の中
寒暑日相推	寒暑 日び相ひ推す
常恐大化尽	常に恐る 大化の尽きて
気力不及衰	気力の衰に及ばざるを
撥置且莫念	撥置し 且く念ふなかれ
一觴聊可揮	一觴 聊か揮ふべし

(「還旧居」)

詩の大意は次のようである。以前、「上京」に家を構えていたが、そこを去って六年後に戻ってきた。帰ってみると悲しみが胸中に満ちる。村の通りは昔のままだが、建物は旧を保っていない。旧宅の周囲を回ると、隣家の老人は殆どいない。ただ馴染みの土地を尋ね歩くと、慕わしい場所が昔のままに残っていた。幻のような人生において、季節の交代が時の流れを推し進める。万物を変えてしまう大きな力の働きによって、自身の気力が五十歳という年齢に及ばないのではないかと憂う気持ちが起<sup>(註16)</sup>こる。しばらく捨て置いて深くは考えまい。取りも直さずこの一杯の酒を飲み干すとしよう。

嘗てこよなく愛した旧居の周囲は、通りは以前のままで、旧来の人家は失せ、かつての隣人たちは殆どいない、と述べられている。この叙述は戦乱のため苦難に遭遇した人々の姿を窺わせる。

例えば、「惻愴」の語であるが、これは陸機の「門有車馬客行」(『文選』巻二十八)に見えるものである。陸機は、「邦族の間を借

問するに、惻愴として存亡を論ず。」と詠う。この樂府は、故国呉が滅亡した後、敵国に仕えた陸機の体験を多分に踏まえたものと見られるが、陶淵明がこの語を用いるのも、軍隊に蹂躪され、荒廃していた故地に対して感慨をもよおしたからであろう。実際に、盧循の反乱が平定された後に江州刺史劉毅は、当時の尋陽の民衆の疲弊・混乱ぶりを次のように述べている。

頃まじしちよ 自り戎車しほ屢しばしばしば駕し、干戈境に溢る。江州は一隅の地を以て、逆順の衝に当たる。力弱く民慢り、而れども器運り継ぐ所なり。桓玄自り以來、駟蹙・残毀せられ、男は養を被らず、女は対匹無く、逃亡・去就、幽深を避けず、自ら財殫つぎき力竭つぎくるに非ず、以て此に至る無いたきに至た乃たる。

〔宋書〕卷五十二庾悦伝所引 劉毅「表」

この上奏文には、天下の要衝である江州は、この度の盧循の乱によつて戦乱の巷となったが、それ以前から桓玄の乱により、民衆は納税・用役により追い立てられ、男は扶養されず、女は嫁にも行けないため、官吏の手の及ばない奥地へと逃れ隠れる有り様だと述べられている。陶淵明が故地に戻った時に旧知の人が稀であったのは、こうした厳しい社会状況の名残であったと考えられる。

しかしながら、周囲の環境は変わっても、旧居には変わることなく、まだ「依依たる」処が残っていた。そこで想起されるのは、前に見た「飲酒」其の四である。陶淵明自身の比喩である鳥にとつて「依依」たる場所は、「孤生の松」であり、それは柴桑県城の陶宅で

あった。今、その陶宅に帰った陶淵明にとつて、それは群れをはぐれた鳥がポツンと残された松にたどり着いたようなものではなかったか。そして陶宅における「依依たる」場所は、「飲酒」其の四のイメージが詠われた「東園」ではなかったか。何故なら「失群の鳥」にとつて慕わしい場所が「孤生の松」であれば、陶淵明の旧居におけるそれは東園しか考えられないからである。

それではその後の陶宅は、どのような佇まいとなつたのであろうか。五十歳以降に作られたことが確実視される陶淵明の詩文に、陶宅とその庭園を具体的に表現するものは殆ど見られないが、義熙十一年（四一五）に作られた「与子儼等疏」から、陶宅が以前のよう自然豊かな環境にあることが窺われる。

樹木の蔭を交へ、時鳥の声を變ずるを見れば、亦復た歛然として喜び有り。常に言ふ、五六月中、北窓の下に臥し、涼風の暫く至るに遇へば、自ら謂へらく是れ羲皇上の人か、と。

〔与子儼等疏〕

また、次に掲げる詩より、陶淵明の晩年においても陶宅が嘗て「帰園田居」五首や「飲酒」二十首に描かれたように、詩人を樂しませる、慕うべき空間として維持されていることが分かる。

孟夏草木長 孟夏 草木長じ

遶屋樹扶疏 屋を遶り 樹は扶疏たり

衆鳥欣有託 衆鳥は託する有るを欣び

吾亦愛吾廬 吾も亦た吾が廬を愛す

(中略)

歛然酌春酒 歛然として春酒を酌み

摘我園中蔬 我が園中の蔬を摘む

微雨從東來 微雨 東よ從り来たり

好風与之俱 好風 之れと俱にす

(以下略)

〔読山海經詩〕其の一)

初夏に植物が生い茂り、家の周りを木々が取り囲む。鳥が行き交い、好風がそよ吹く。このような環境は、前に見た「与子儼等疏」と同様に陶淵明を喜ばせ、「歛然」たる気分にはたらしめるものである。陶淵明は旧居へと帰った後にも、移居以前と同様に自身が好ましく思う空間を再構築し、「吾が廬」を愛する生活を営み続けたのである。

おわりに

以上、陶淵明の住まいについて私見を述べた。小論でふれた陶淵明の「飲酒」其の五は、後世にも大きな影響を与えているが、最後にその第六句目、「悠然見南山」の第三字の異同についてふれておきたい。近年、田晧菲氏によって、「見」字は「望」字に作るべきであり、「見」字は蘇軾の捏造であるとの説が提唱されている。<sup>(註)</sup>確かに唐人が「飲酒」其の五を踏まえたと思られる詩には、田氏が述

べるように「見」字を「望」字に作った抄本を閲覧したと覚しきものがある。しかし、「飲酒」其の五の「見」字が、蘇軾の捏造によるものとする見解には首肯し難い。案ずるに唐代には、通行する『陶淵明集』のように「見」字を用いたものと、『文選』のように「望」字を用いたものの両方が行われていたと考えられるからである。例えば田氏が指摘するように、白居易の「效陶淵明体」其の九の「時傾一尊酒、坐望東南山」の二句を見れば、彼が見た「飲酒」其の五は、「望」字を用いていた可能性が高い。だが、次に挙げる銭起の詩を見れば、彼が見た「飲酒」其の五は「見」字に作っていたことがほぼ確実視される。

乱水東流落照時 乱水 東流す 落照の時

黄花滿徑客行遲 黄花 徑に満ち 客行遅し

林端忽見南山色 林端に忽ち見る 南山の色

馬上還吟陶令詩 馬上に還た吟ず 陶令(陶淵明)の詩

(銭起「晚過橫瀨、寄張藍田」『錢考功集』卷十)

さらに言えば、「見」字を蘇軾の捏造であると思なすのも果断に過ぎよう。何故なら我々は、蘇軾以前にも陶淵明を仰慕した宋代の士大夫がおり、「悠然見南山」と書かれた「飲酒」其の五に基づいて詩を作っていることを知っているからである。

吾愛陶淵明 吾は愛す 陶淵明

扞衣遂長往 衣を扞ひて遂に長往す

手辞梁主命 手は梁主の命を辞す

犧牛憚金鞅 犧牛は金鞅を憚る

愛君心豈忘 君を愛す 心に豈に忘れんや

居山神可養 山に居りて神を養ふべし

輕拳向千齡 輕く拳がりて千齡に向なんとし

高風猶尚想 高風 猶尚想ふべし

(司馬光「独樂園七題・見山台」『温国文正司馬公文集』卷四)

の編者である。右の詩は、司馬光が洛陽に退居し、『資治通鑑』を編纂していた時の作であり、詩の題に見える「見山台」とは、司馬光の「独樂園」に造成された高台である。見ての通りその名は、「悠然として南山を見る」に由来する。司馬光は洛陽にて高山に目をやりながら、廬山を仰ぎ見る陶淵明の姿を思い描いたのである。蘇軾が「望」字を非とし、「見」字を是としたのは、決して彼の独断でも捏造でもない。北宋時代の士大夫達によって、悠然と廬山を仰ぎ見る陶淵明のイメージは共有されていたのである。

### 注

- (1) 笠間書院、二〇〇七年。該当の箇所は、第五章「陶淵明の故居」
- (2) 陶宅の構成については、増野弘幸「陶淵明における庭の表現について」、『新しい漢字漢文教育』三五、二〇〇二年、同「陶淵明における家の意味について」、『大妻国文』三六、二〇〇五年)に紹介されている。
- (3) 原文は以下の通り。「乃瞻衡宇、載欣載奔、僮僕歡迎、稚子候門。

三径就荒、松菊猶存。携幼入室、有酒盈樽。引壺觴以自酌、眴庭柯以怡顏。倚南窓以寄傲、審容膝之易安。(中略) 雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳以將入、撫孤松而盤桓。」

- (4) 「東籬考」『隔籬』の詩想―『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年)

- (5) 該当する原文は以下の通り。「此詩純是比体。蓋陶公自彭澤解綬、真如失群之鳥、飛鳴無依。故独退守田園、如望孤松而斂翮、託身不相違也。」(『東山草堂陶詩箋』卷三)。ただし「詩文繫年」では、「飲酒詩」は、彭澤県令を辞する前に作られたとされている。なお、丘嘉穗の文章は、『陶淵明研究資料彙編』下冊(古典文学研究資料彙編、中華書局、一九六二年)に拠った。

- (6) 鈴木虎雄『陶淵明詩解』(弘文堂、一九四八年)、二七三頁を参照。以下該当する文章を引用する。「淵明の家は柴桑の村の中でも南面のはづれと見えたり、(中略)『帰園田居』詩の中にも開荒南野際とあり、又た野外罕人事、窮巷寡輪鞅といふあり、いづれも村はづれの間かなる状をいふ、かゝる村端にてあればこそ遠人の村も眺められる、又た次の句の南山も思ふまゝに見られるのである。」

- (7) 北宋・樂史等編『太平寰宇記』を始めとし、陶淵明故居を廬山南麓の楚城郷柴桑山、星子県栗里村に求める説がある。

- (8) ただし、近年、石川忠久氏を始め、「見南山」ではなく「望南山」の解釈も有力であることが提唱されている(『陶淵明とその時代』、研文出版、一九九四年、内篇第四章・第二節「見南山」と「望南山」)が、小論では「見」字と「望」字のいずれが是であるかは問わない。

- (9) 古直は『陶靖節詩箋』(広文書局、一九七四年) 附録「陶靖節年譜」において、「与殷晋安別」等に基づき、南村を柴桑県城に近い

村であるとする（義熙六年の条に「而知南村実在尋陽負郭」とある）。

(10) 逯欽立氏は「移居」の制作時期を義熙七年と見なす。これは「与殷晋安别」を義熙八年の作とし、これに「去歳家南里」とあることを承ける。

(11) 龔斌氏も『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、一九九六年）、「和劉柴桑」の箋において、同様の見解を呈している。該当する原文は以下の通り。「西廬決非位於南村、竊以為西廬乃旧居和南村之外的亦一居所。淵明旧宅於義熙四年燬後、暫居門前水浜舫舟之上、然此終非久長之計、或重整旧宅、或另徙他所、此理所必然者也。」

(12) 『資治通鑑』卷一一五、晋紀三七・安帝義熙六年を参照。

(13) 上田武氏「陶淵明の若き友人たち―その贈答詩の世界―」（『日本中国学会報』四六、一九九四年）を参照。

(14) 原文は以下の通り。「盧循、寇掠諸県無所得。謂徐道覆曰、師老矣。不如還尋陽、併力取荊州、拋天下三分之二、徐更与建康争衡耳。」

(15) 尋陽が長江中流域において政治・軍事上重要な都市であったことは、上田氏によって指摘されている（注1所掲書、一二九～一三〇頁を参照）。

(16) 『礼記』王制篇の「五十にして始めて衰ふ」を踏まえる。

(17) 原文は以下の通り。「自頃戎車屢駕、干戈溢境。江州以一隅之地、当逆順之衝。力弱民慢、而器運所繼。自桓玄以来、驅蹙殘毀、至乃男不被養、女無对匹、逃亡去就、不避幽深、自非財殫力竭、無以至此。」

(18) 原文は以下の通り。「見樹木交蔭、時鳥變声、亦復歛然有喜。常言、五六月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。」

(19) 「読山海経詩」の制作時期は、逯欽立「詩文繫年」は義熙四年以前の作と見なすが、これについては以前論じたことがあるため従わず、最終的な成立は、劉宋の永初元年から永初三年の作であると見なす。拙稿「陶淵明『読山海経』詩に見える『楚辞』の影響」（『東洋古典学研究』七、一九九九年）を参照されたい。

(20) 田氏は、『文選』及び『藝文類聚』所引の陶詩を根拠とする。田氏の所説については、『塵几録 陶淵明与手抄本文化研究』（中華書局、二〇〇七）第一章「得失之間・見山与望山」を参照。